

## 開港直後の仁川(上)

明治 16 年(1883)1 月、仁川はようやく開港した。セレモニーがあったのかどうか、どこにも記述はない。朝鮮政府とその後ろ盾になっていた清国は、日本が勝手にやっていることだと冷ややかだったから派手な式典はせず静かに肅々と門戸を開いたと思われる。

誤算だったのは居留地になかなか日本人がやってこないことだった。4 月 5 日付で杉村副領事が外務大臣に提出した報告書には「この 3 ヶ月間にやってきた内地人はわずか 3 人」と書いてある。しかし「韓国人は漢城や釜山から集まりはじめ、新築家屋がすでに 5、6 軒」と追記している。

4 月 13 日付報告では「日本から鎮西丸、同福丸が入港したが、朝鮮側の税関がまだ設置されていないので当領事館が仮手続きをし、朝鮮側に連絡した」とある。朝鮮政府はのんびりしたものだだった。

まがりなりにも税関ができたのは 6 月で、税関長は英国人、スタッフは全員欧米人だった。スタッフにロシア人土木技師がいて満潮時の船着き場と干潮時の船着き場を建設している。だが干潮時には船を降りて裸足になり、浅瀬を歩いて棧橋までたどりつくという粗末なものだった。

9 月になってようやく月 1 往復ながら神戸—下関—長崎—釜山—仁川の定期航路が開設され、港らしくなった。税関は欧米からの貨物もこの定期船で朝鮮に持ち込むことを許可している。

10 月には居留地の区画整理が終わり、24 区画が競争競売ならぬ競争競賃にかけられている。釜山や元山の居留地は一括して日本政府が借り上げ、それを又貸しする方式だったが、仁川では個人が朝鮮政府と賃貸契約する形式だった。首府に近いからだだった。

港としての環境が整ってくると、条約締結を求める欧州各国からの船は予想以上に入港するようになった。日本人でいち早く仁川に住み始めた堀久太郎は、この船の乗客、船員相手に商売することを思いつき、最初は鞆類を持ち込んだ。よく売れたが「牛肉、野菜は手に入らないか」という声が多かったのも、それらを仕入れて持ち込むと飛ぶように売れた。そうして財を成し、大仏ホテルを建設、一時は大変な羽振りだった。

この堀久太郎と酒・肥料商の田中良助が最初に移住してきた日本人だった。開港の年に仁川に移り住んだ人たちは約 20 人でその後明治 16 年組とよばれ、居留民から尊敬された。穀物商、精米業、肥料商、回漕業、雑貨商、貿易商などだった。漢城の公使館員も仁川の領事館員も、日本から洗濯屋がすぐ来るだろうと心待ちにしていたのになかなか来ず、数年間、洗濯物をわざわざ船で長崎に送りクリーニングしてもらっていた。

12 月になると、清国も仁川の重要性に気がつき、日本人居留地に隣接して清国人居留地が設定され清国人が住み始めている。

## 開港直後の仁川(下)

仁川は明治 16 年(1883)1 月、開港はしたものの不思議なことに輸出入貿易のデータが残っていない。金額が少なく税関が無視したのか、朝鮮政府に関心がなかったのか、また初期の税関スタッフは全て清国が選任し、任命しているから、清国の統計に含まれてしまったのか、仁川府史の筆者も首をかしげている。

17 年からは詳細な統計が残っている。この年には清国、英国が相次いで領事館を開設しているから国際的にもきちんとしておかなければならなくなったからであろう。

その統計によると主な輸出品は大豆、牛皮、金地金、輸入品は綿布、銅、石油がそれぞれベストスリーである。

まず輸出をみると、大豆は平安道、黄海道で産出されたものが集められ出荷されている。17、18 年はそれぞれ 1000 トン、19 年は 2000 トンだったが 20 年には 10 万 4000 トン、21 年には 21 万 2900 トンと急増した。日本郵船は定期便で運びきれず、チャーター便を仕立てたほどだった。

朝鮮半島では役牛としての牛が沢山飼われており、体格も日本の牛より大きかった。しかもその皮は弾力性に富

み、なめし方や乾燥方法を改良すれば優れた商品になった。最初は欧州向けが多かったが、17、8年ごろから日本が軍隊用の靴、背囊、ベルトなどに用いるようになり、日本向けが急増している。

金地金は主として半島北部で産出され、元山からの輸出が多かったが、漢城も集積地だったため仁川からも輸出された。特に開港後しばらくは争乱が続いたこともあり、財産を金に換えて持ち出す人がかなりあり、統計に現れたものである。ただ金の輸出権は34年まで清国が握っていた。

釜山港からは米が日本向けに大量輸出されていたが、仁川港は花房公使が「当面は輸出を認めない」と約束していたから、米輸出は皆無だった。米輸出が解禁されたのは朝鮮半島が大豊作に沸いた23年からである。

輸入品のうち綿布はほとんどが英国産であり、清の商人が一手に扱っていた。最初のところは絹布も麻布も同じ分類で一緒に扱っていたので日本では絹はほとんど輸入していないと考えていたが、詳細に調べてみると清国からかなり入っていたことが判明、驚いたという記述がある。清はのちに高価なもの同士ということで朝鮮人参との物々交換のような形で決済するようになっている。

石油は灯明用の需要である。もともとは菜種油や魚油が使われていたが石油の方が安く、しかも明るいため使用が増えた。銅は銅銭鑄造用で、仁川の日本人商人はこの銅の取引から始まったといわれている。

## 甲申政変と仁川(上)

漢城で甲申政変と呼ばれるクーデター事件が起きたのは、仁川港が軌道に乗り始めた明治17年12月4日である。壬午軍乱からわずか2年後、またもや血なまぐさい事件となり、日本人多数が犠牲になった。

事件は、壬午軍乱後清の顔色ばかり窺って改革を一向に進めない閔妃に対し、日本にならって近代化を推進しようという独立党の不满が原因だった。金玉均、朴泳孝、洪英植ら独立党の人たちは武力で政権を奪取することを計画したのだった。独立党は日本の福沢諭吉、井上馨らと接近、教えを受けている。当時清はベトナムの支配権を巡ってフランスと戦争していた。そのため袁世凱是北京に帰っており、漢城に駐留していた清の軍隊も少なくなっていた。清も二正面作戦はとれないからチャンスだと金玉均たちは判断した。

その日は漢城の郵便局落成記念パーティーが夕刻から行われ、政府高官やフート米公使、アストン英領事らが出席していた。日本の竹添進一郎公使は欠席している。事件が起こるのを知っていたとおもわれる。

パーティーが終わりに近づいた午後十時、突然大音響とともに爆発音が聞こえ、火災が発生した。様子を見に外に出た閔妃の一族が殺害され大混乱に陥った。金玉均は直ちに国王・高宗に面会「清兵が反乱しました。直ちに日本兵を守備につかせてください」と上奏、国王の要請で竹添公使は日本兵150人を率いて王宮の警備についた。国王はあらかじめクーデターに賛意を表明していたのである。こうして独立党は政権についた。

独立党政権は翌日、清国への朝貢とりやめ、門閥の廃止、地稅制度の改革、行政・財政・官制、軍制の抜本改革など革新的な政策綱領を発表している。

ところが閔妃は密かに清国に使者を送り、出兵を要請したのである。6日午前、袁世凱が1500人の兵と共に戻って来た。実は事変の数日前、清国は清仏戦争での敗北を覚悟しベトナムの宗主権を放棄すると内定、停戦交渉を模索していたのだった。清国としては朝鮮だけは死守しなくてはならない状況となり、それが迅速な行動につながっていた。金玉均たちはそのような情報をつかんでいなかったのである。

清軍は王宮の東門である宣仁門から乱入、朝鮮兵も加わって日本軍との戦闘になった。衆寡敵せず敗色が濃くなったため竹添公使は国王を安全なところにお遷しし、公使館に引き揚げた。独立党の洪英植は国王とともに残り、殺害されている。独立党政権は3日天下で終わった。

竹添公使が兵とともに公使館に戻ってみると、やはり清兵と群衆に襲われていた。日本は反逆者を支援したという噂が流れていた。公使館内には民間人30人も避難してきていた。公使館に入れなかった日本人は暴徒によって虐殺され、女性は陵辱されて殺された。公使館はその日は暴徒の侵入を防いだが翌7日、食料が尽きたため仁川

への脱出を決め、午後 2 時、隊列を組んで公使館を脱出した。公使館員と民間人合わせて 100 人と兵 140 人である。一行は漢城西門を突破、公使館が焼き討ちされているのを望見しながら仁川を目指し、8 日午前 8 時、仁川領事館に到着した。

## 甲申政変と仁川(下)

甲申政変は見方によっては第一次日清戦争と言ってもいいくらいの事変だった。竹添進一郎公使が独立党と密接な関係にあったことは否定できない。歴史書にはあまり書かれていないが、日清両軍が戦ったことは事実である。磯林真三大尉をはじめ軍人軍属が 11 人、民間人が 29 人、計 40 人の死者がでていいる。仁川では米や石油の価格が通常の 10 倍に跳ね上がった。開戦を予想して居留民のなかには日本に帰って行った人もかなりあった。

本格的戦争に突入しても不思議ではなかったが、恐らく明治政府は勝つ自信がなかったのではあるまいか。穏便に解決しようと懸命に努力したようである。

たとえば竹添公使は事変翌年の 1 月 9 日に仁川で行われた慰霊祭の直後に帰国、公使だけではなく外務省をも辞職した。現場責任者として詰め腹を切られたのである。竹添はその後学者に転身、漢学者として大成し東大教授など歴任、大正 3(年 1914)日本学士院賞を受賞している。次女須磨子は講道館柔道創始者である嘉納治五郎の妻になった。竹添の後任の公使には、釜山と仁川の初代領事を勤めた近藤真鋤が就任した。

独立党の金玉均らは日本に亡命してきたが、政府や要人はできるだけ関係しないよう、いやむしろ冷たくあしらっている。清国にそれだけ気を遣っていた。だが身辺警護はきちんと行われ、閔妃の放った刺客が何人も日本で逮捕され、仁川に強制送還されている。結局金玉均は誘いに応じて上海に旅行にでかけたところで暗殺された。

現在の韓国の歴史教科書はどう教えているかわからないが、もしも独立党政権が継続していたら自力での近代化が進み、日韓併合という事態にはならなかったのではないだろうか。

事変処理を巡っては、日本と朝鮮の間は井上馨外務卿が訪朝、漢城条約を締結し日本公使館を朝鮮政府の責任で新築するなどが約束された。慰謝料支払いも決まった。

清国との間では 4 月になって伊藤博文が全権大使となって北京に派遣された。清は北洋通商大臣の李鴻章が代表となり天津で交渉が行われた。日本は敗者の立場だったが伊藤は臆せず 40 人も死者が出たのは清国の責任であるとして賠償を求めた。李鴻章は「最初に発砲したのは日本であり、死者は暴徒によるもの。もともと日本は反逆者と結託していたのではないか」と反論、両国は真っ向から対立した。

そこで伊藤は論点を変え、そもそも両国が軍を漢城に駐留させていることに原因がある。双方とも撤退すべきだと提案すると李鴻章も賛成した。伊藤はさらに、朝鮮に対して第三国が侵攻した場合を除き、両国とも出兵しないと約束しようと提案したが李鴻章は難色を示し、出兵するときはお互いに通告するという条件で合意、天津条約が締結された。4 月 18 日だった。

この条項に基づき甲午農民動乱(東学党の乱)に際して清国、続いて日本が出兵、日清事変につながった。

## 甲申政変後の仁川

甲申政変が終息したあとの仁川は、清国の勢いが強くなり、日本にとっては厳しい時代になっている。朝鮮政府は独立党の幹部とその三親等以内の人を逮捕、処刑してしまったから親日派はほとんどいなくなった。処刑されたのは 4000 人とも 5000 人ともいわれ、あまりの残酷さに福沢諭吉は李氏朝鮮という国自体に愛想をつかしてしまったくらいだった。

清国の影響力が強くなった。欽差総弁という肩書きになった袁世凱が漢城に常駐、政治を支配した。人民は袁世

凱を「副王」と呼んだが実際は国王以上の権限を持っていた。敗戦後の日本にやってきたマッカーサーのような存在である。

仁川には中国人がつぎつぎと住み始め、中華街が賑やかになった。反対に日本人はひっそりと息をひそめていた。朝鮮の人たちは、中国人にたいしては大国大人と尊称を用いたが日本人に対しては倭人(こびと)と蔑称するようになった。

明治 17 年の仁川港の輸出入貿易額は 18 万 4917 円だったが 18 年は 15% 減となり、22 年までは横ばいか微増にとどまっている。23 年からは米の輸出解禁でなんとか息を吹き返した。

事変から 8 年後の明治 26 年 6 月、英国の地理学者で作家のイザベラ・バード(結婚後イザベラ・ビショップ)が仁川を訪れ街の様子を活写している。女史は大仏ホテルではなく、中華街の中の清式ホテル「スチュワーズ」に宿泊した。英国領事は清国びいきだったからと思われる。

「清国人居留地は充実しており、立派な清国政府の官庁もあれば町の役場もあり、繁盛しているし大きな商店もある。絶えず爆竹や銅鑼や太鼓を鳴らす音がして賑やかで騒々しく、明らかに清国人は商売において日本人に大きく水をあけている。彼らは外国の得意先をほぼ独占し、済物浦にある大きな商店はソウルに支店を持っている。(中略)日本人居留地にある商店の商品は自国民の需要を満たすものにすぎない」(講談社学術文庫・朝鮮紀行=時岡敬子訳より抜粋)

そうして女史はその理由を「豊臣秀吉の朝鮮出兵以来、三世紀にわたる憎悪によって朝鮮人は日本人が大嫌いで、おもに清国人と取引しているからである」と解説している。

しかし現代の目からみると女史はやや取材不足だったようである。朝鮮人は清国人も「狡猾」「何をするかわからない」と嫌っていた。あれだけ長い間朝鮮半島を支配しながら、中華街は仁川にしか存在しないことはひとつの傍証になるだろう。

甲申政変以後の約 10 年間、清国人が日本人を凌駕していたのはひとえに袁世凱をトップとする清国の政治力に負けていたのである。李氏朝鮮の政府も袁世凱の前に跪いていたし、英、仏、独の公使、領事たちも日本よりは清国の肩を持っていた。それが影響していたのである。

## 宗教施設

筆者は古都・開城から仁川に引っ越した時、なんて寺社仏閣の多い町なのだろう、と不思議に思った。なにしろ旭町の我が家の前の道路は仁川神社の参道であり、裏手には浄土宗明照寺、日蓮宗妙覚寺、西本願寺、旭国民学校の周囲に東本願寺、金光教、フランス教会、やや離れて英国教会があった。それぞれ素晴らしい社殿、寺院、伽藍を持っていた。金持ちの多い町だなと思った。

仁川に最初に布教にやってきたのはキリスト教の各派だった。李氏朝鮮は 1860 年代、大院君がキリスト教を大弾圧、宣教師や信者 5000 人余を処刑、信者は 1 人もいなくなっていた。それだけに熱心だった。まずメソジスト派は朝鮮が開国すると大々的な布教を計画、1884 年から朝鮮各地に教会を開きだした。仁川には明治 18 年(1885)4 月、アッペンツェル神父が各国居留地の一角で布教を始め、24 年(1891)に内里教会を建てた。続いて花鳥教会、仁川聖潔教会、日本人を対象にした日本メソジスト仁川教会を建てている。

我々がフランス教会と呼んでいたのは正式には天主教会堂といいローマ・カトリックの聖堂だった。明治 22 年、フランス・パリからウイヘルム神父が来て布教を開始し建てたものである。韓国ではカトリックとプロテスタントは別の宗教とされ、カトリックの建物は聖堂、プロテスタントの建物は教会という慣習があり、天主教会堂は現在、沓洞聖堂と呼ばれている。英国の聖公会はその翌年教会を開いた。医師のランディースが付属病院を作ったため韓国人に喜ばれ、順調に信者を獲得した。

居留民のなかから神社を建てようという声は早くからあったが、場所をどこにするかでいろいろ議論があったよう

である。ちょうどその頃、多所面浮雄と呼ばれていた小高い丘を朝鮮政府が韓国人用の墓地にする案が浮上した。そうすると土地は無償で取り上げられるため韓国人地主が居留民会に買い取りを要請してきたのである。居留地の近辺では最も眺望の良い場所だけに居留民会は公園用地として買収、日本公園と名付けた。

神社をつくるのに相応しい場所を得たわけで、すぐに林権助領事が伊勢神宮に連絡し、天照大神の御霊代の拝戴をお願いした。社殿は 23 年 8 月に完成、仁川大神宮略称仁川神社が発足したのである。仁川神社境内の玉砂利は黒光りする御影石で、大きくそして深かった。豪華ではあったが歩きにくく、ラジオ体操するにも跳ぶのに苦労した思い出がある。恐れ多いお社であると韓国人に思わせるためだったのではないだろうか。

仏教関係では明治 18 年 9 月、浄土真宗東本願寺が支院を開設したのが最初である。布教にあたった朝倉多賀磨師は 1 週間ごとに信者の家を変えながら寄食するという苦勞を重ねて信者を増やした。他の宗派が出てくるまで、葬儀は全て東本願寺で行われた。

次に布教を始めたのは日蓮宗で 26 年、開教師を送り込み日本人墓地の一角に碑を建てるのを許された。それを契機に信徒が集まりだし 36 年、妙覚寺を建てている。浄土宗は 31 年、2 人の開教使を仁川に派遣、布教を始めている。最初は河野竹之助宅で会合していたが各国居留地内の水田別荘を購入、仮教会所にした。36 年、日本人共同墓地が栗木町に移されたのを機に跡地 450 坪を手に入れ明照寺を建立した。続いて 40 年にかけて高野山遍照寺、西本願寺が進出した。